寮歌が導いた父の青春

北大・恵迪寮で歌い継がれ80年「湖に星の散るなり」

北区　日本三大寮歌の一つ「都ぞ弥生」で知られる北大の恵迪寮。寮歌は「都ぞ弥生」だけでなく、毎年1曲ずつ寮生によって作られ、歌い継がれていますが、80年前の寮歌作曲者の長女が、その歌に導かれるようにして7月中旬、恵迪寮などを訪れ、父が青春を謳歌した学生時代をたどりました。最後は恵迪寮同窓会のメンバーが合唱してくれた父の寮歌に見送られ、「本当に素晴らしい経験ができました」と感激をかみしめています。

（小野高秀）

恵迪寮をバイクで後にする立花紀子さんに、「湖に星の散るなり」と歌う森川満彦事務局長（左）ら

寮歌は1941年（昭和16年）に作られた「湖に星の散るなり」。戦争の色が次第に濃くなっていく中、前年から徒歩旅行の目的地となった支笏湖を歌ったもので、当時工学部2年だった岡田和雄さん（1990年死去）が作曲しました。

寮歌では珍しい静かなバラード調で、180曲以上ある恵迪寮歌の中でも、「都ぞ弥生」と並んで人気の高い名曲です。

OBから歌唱集

岡田さんの長女立花紀子さん(64)＝大阪府箕面市＝がこの曲を知ったのは3年前。札幌を訪れて北大を散策し、父が恵迪寮生だったことや寮歌を作ったらしいことをフェイスブック（FB）でつぶやいたところ、FB仲間が恵迪寮OBの友達にも紹介。OBからは寮歌集のデータとともに、「愛される名曲。たくさん歌いました」「お父さまの業績は誇らしいことです」などとメッセージが届きました。

「お父さん、良かったね、みんな歌ってくれてるんだってビックリ！」。その時の感激を立花さんはそう書き込んでいます。

そして、その書き込みを見た人から突然、メッセージが寄せられたのは今年6月でした。息子が現恵迪寮生で、恵迪寮同窓会が昨年、初めて作製した「寮歌カレンダー」の7、8月分として「湖に星の散るなり」の歌詞が満天に星が輝く支笏湖の写真とともに紹介されているとのことでした。

作曲者の長女・立花さん 足跡たどる

立花さんはすぐに同窓会事務局に連絡して、カレンダーを取り寄せるとともに、偶然にも大好きなスピッツのライブとバイクツーリングで訪れることが決まっていた札幌で、支笏湖と同窓会事務局も訪ねることにしました。ライブは当初、昨年6月に釧路で開催の予定でしたが、コロナ禍で1年遅れて札幌に。しかも、父の歌がカレンダーに採用された7月の開催となり、「スピッツがくれた奇跡」と思ったそうです。

前日の支笏湖に続いて訪ねた北大内の同窓会事務局では、森川満彦事務局長(66)や支笏湖の写真を撮影した吉成久和さん(66)らが立花さんを歓待しました。数多くのCDに収録された「湖に星の散るなり」や岡田さんも写っているであろう41年の集合写真が載った写真集などを紹介し、旧恵迪寮跡地や現在の恵迪寮を案内。立花さんは寮に張られたポスターを見て、学生自治の伝統を感じ、学生時代の父にも思いを巡らしました。

同窓会生が合唱

立花さんは「音楽が好きで、私にもピアノを習わせてくれました」と父をしのび、「『湖に星の散るなり』は賛美歌のような歌。おじいちゃんがクリスチャンだったからかな」。寮を去る時には、その父の寮歌を自分と同世代の同窓会メンバーが合唱してくれ、初めて生の歌声を聴くこともできました。「次に札幌を訪れる時は、支笏湖にキャンプして、ぜひ、湖に散る星を見なくちゃ」と楽しみにしています。

同窓会メンバーも初めて作った寮歌カレンダーが80年にまたがる素晴らしい出会いを生んだことに感激し、森川事務局長は「来年のカレンダーもいいものを作らなければ」と意気込んでいます。

7、8月分として「湖に星の散るなり」が掲載された寮歌カレンダー